

---

# ~ Esper ~ 何でも屋営業中

みつほ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

＼Esper＼ 何でも屋営業中

### 【Nコード】

N3942A

### 【作者名】

みつほ

### 【あらすじ】

高校生優輝は、ある日。英樹と椎に出会う、その二人は、誰も信じられない能力を持っていた。Pサイs i一般的には超能力と言われている。出会った優輝も実は、ちょっとした能力が…何でも屋を中心にバタバタと繰り広げる不思議な話し

## 事件と能力は紙一重（前書き）

超能力、これは、少し興味がない人は興味がないような話です。ちよつとマニアふうになっているものも多いため、もし、「こんな小説認められない」と言う方がいらつしゃるのなら、見ずに限ります。そう言う話が好きな方は、読んでみてください。

## 事件と能力は紙一重

ビルが立ち並ぶ普通の街並みの都会

その、とある街中の道路で、交通事故が起こった。

運転をしていた男性は叫ぶ

「俺じゃない・・・違うんだ」

それを、誰が信じてくれると言うのだろうか、だが、その人は頼むように、青ざめた表情で叫んでいる。

側のビルの上では見物をするかのように、煙が上がる事故現場を、身乗り出しながら見ている一つの影がある。

その影は、どうやら男、首にバンダナを巻いて、二十歳前後で、見たとおり仕事もせず、遊んでいるような印象を受ける格好をしている。

その男は、クスツと笑う。

「あゝあ、やってるなあ・・・今日も派手なこと」

そう、独り言のように呟いた。

彼の名は、浅茅英樹あそうひでき

遊んでいるような容姿だが、彼には彼なりの仕事があった。今、このビルの上にいるのも、仕事の一つ・・・いわゆる、任務である。

「んー・・・俺、役たたず」

手すりでゴロゴロしながら、事故現場に目を下ろしている。

すると、野次馬のある一定の場所に眼をやった時、彼は何かに気がついた。

「・・・！」

ガバツと体を起こして、口元がほころぶ

「・・・ビンゴ」

そう呟くと、強く念じる

「しーちゃん、見つかったぜ？あいつ、薄い灰色の半そでのおつちやん・・・あいつだ」

「・・・珍しく早いな　お前も、現場に来い」

「ういっす！」

そう、これが、彼の仕事・・・実を言うと彼には人とは違う力を持っている。

英樹は回線らしきものを落とすと、その場を退散しようとする。だが、警備員らしき人が屋上に来てしまった。

「な、何だね君・・・君のような者が来る場所じゃ　」

「はいはいはい、分かってるって、すぐ退散しますよ」

だが、それも簡単にはいかないのが、会社のビル

「待ちたまえ、少し話を聞かせてもらおうか？」

「ちよ、俺、急いでんの・・・んその後で」

すぐに、耳元でキーンと耳鳴りが起こる。

「何してるん、早うせい！！」

「だーもう、うつとうしい」

英樹は、警備員の頭に手を置き目と目を合わせた。

警備員は最初、警戒した態度だったのだが、何もなかったかのように、その場からいなくなってしまった。

英樹も一息入れると、現場へ走り出した。

「しーちゃん・・・あれ？」

「・・・・・・・・」

「・・・あ・・・・・・・・逃がしちゃいました？」

現場には野次馬はいるが、探している人物はもういなくなってしまうっていた。

そして、英樹が話しかけた人物、身長が高く、スーツが似合うよう

な男、一言で片付ければ頭がよさそうな人だ。表情からしてとてもクールだが、今は怒りが爆発しそうな表情をしている。名前は椎<sup>しい</sup>という・・・それ以上、自分を語らない。

「なぜ、お前はすぐ来んのや・・・」

「・・・あ、け、警備員のおっさんがさ・・・」

彼は、どうやら怒ると関西弁が出るらしい。

「このアホが！あれを使えばええやろうが！」

「んな事、言われたって・・・めんどいし」

この二人にとつては、いつもの会話だが、このミスは、ちよつとした出会いを引き起こす事となる。

そして、こいつらは第六感である、いわゆるサイコを持っている。

さつき警備員にしたのは、「マインド・コントロール」名前しか聞かない事が多いし、催眠術で有名だ、だが・・・彼、英樹の得意の能力である。

そして、野次馬の中で当てた、あれは「シンクロニティー」と言う。あれは、同じ能力者が少しでも力がぶつかりと分かる事なのだ。後は、一般的には、「テレパシー」と、思われるだろうが、それとは違い「コネクト」と呼ばれている。使い方は色々ある。が、2人は、これで会話をしている。だが、使うには頭が少し痛くなるようだ。

これと「シンクロ」は、能力者全員にできる事である。

彼らの仕事・・・いや、やっている事は自分達と同じ能力を悪用するやからをなくそうとしている事、だが、それは「裏」であり、表は「何でも屋」をしている。

「あゝ...どうしようか、シーちゃん」

「どうするも、こうするも、何もできないから...戻るぞ」

二人は、その場を後にした。

勿論、自分達の事務所へと

## 事件と能力は紙一重（後書き）

ここまで読んで下さって有難うございます。最後はあんな書き方になつてしまいました。が、実は超能力とは言いがたいですが、数通りあるようです。まだ、名前しか知らないのも多いですが出していただけだと思つています。

つまらなそうでしたら、すぐに切り上げる話なので、この凸凹2人を暖かな目で見えていてあげてください。

## その後の二人・・・

都会の裏と言うべき場所に、少しぼろいビルが一つある。廃屋と言っているビルだが、ここに英樹と椎がいる。

少し階段を上がるとドアの前には、何でも屋の看板がある。一応営業をしているようだ。

「なあ、しーちゃん。この事件、今日もあつたみたいだな」

英樹は、古いソファーに寄り掛かり、テレビのニュースをみながら椎に言う。ニュースでは、事故扱いになっている。一般的に言えば、ただの交通事故なのだから、仕方がないと言えば仕方がない。

「お前がすぐ来れば、こんな事は防げたんだがな」

まだ根に持っているのか、突っ掛かる椎。

「悪かったって・・・でも、しーちゃん 一人でも平気だったんじ

ー

「ほう？英樹・・・分かって言うてるんか？力を使う時、どうなるか言うてみい」

あまりの英樹の馬鹿な発言に、怒りが関西弁で表れる椎、英樹も慌てて考えると、謝る。

「すみません、もう言わない・・・」

英樹に言わせようとしていたのは、能力（力）の事なのだ。

一人が、力を使っている間は動きが鈍くなる。ほとんど何も出来なくなるのだ。それは、欠点であり、一人で行動できない理由でもある。つたりする。

「でも、どうするんだよ・・・逃がしちゃったけど、顔分かったんだし追いかけて」

「アホか・・・シンクロしたって事は、向こうも“気がついてる”って事だろうが」

眉間にしわを寄せながら椎はため息を漏らす。



「まあまあ、現場に行ってみようぜ？どうせ、人なんか来ねえって！」

英樹は立ち上がると、ドアを開ける。

「はぁ・・・来ないって事は、金も稼げないって事なんだがな」

そう、言葉をもらしつつ椎も一緒に外へと行く事にした。

歩きながら2人は、例の事件の話をする。

「あれってやつぱり、俺と同じ、マインド・コントロールってやつかな？」

「いや、そうとも限らない、もしかしたら違う働きを持った力かもしれない」

「違う力って・・・俺、ぜーんぜん、分からね」

「それは、お前が考えようかもしれないからだろ？」

こんな会話を周りが聞いたら、多分、変な人たちに思える事だろう。ピンつと何かがよぎった、言葉で表すことができない。体に電気のように一瞬、走ったのだ。

英樹と椎は、振り向いた。横を見たりもした。だが、そのピンと来た人物が見当たる事がなかった。

「なぁ、さっきの感じてさ」

「・・・シンクロの感覚だ」

人込みの中でたたずむ2人、ただ黙って、人込みを見渡しているのであつた。

## その後の二人・・・（後書き）

この話は、超能力・・・っぽい、話なので、「この力の意味が違  
う気がする」っと、思っけていても小説で言う事で見逃してくださ  
い。でも・・・シンクロは同じ力が交わるって意味があるそうなので、  
こうなつた限りです。

## プリコゲニション（前書き）

今回は、結構長くなりました。

読んでくださる方々、有難うございます。

これでは、少し人物を掘り下げるのに力を入れてみたつもりなのですが・・・多分、少し余分な事になっている気がします・・・（汗）  
気にせず、見てください。

## プリコゲニション

街で飛び交う話は 起こる交通事故の話 周りは、事故やら祟りやら幽霊やら騒いでいる。

そんな街中を、紺のブレザー 灰色のネクタイの制服を着た高校生の男の子が、歩いている。とてもつまらなそうに、周りが勝手に流している話題を耳に入れる。

（はあ・・・よく、同じ話題で、会話が途絶えないよな）

そんな事を、思いながら歩いていた。

彼の名は、たかさき ゆづき高崎優輝

彼の身の回りでは、色々な事が起きている。それは、街で騒がれている事故どころではない・・・っと、彼は思っている為、周りの話題が、馬鹿らしく感じているのだ。

でも、彼の方にも確信が持てないぶん、困っている。

今、優輝は学校へ行く途中・・・いつもの通いなれた道、商店街を歩いている・・・すると、ふと、彼の周りの景色が音もなく、“飛んだ” それでも、彼の方は慣れているのか、冷静だった。

「また・・・？でも」

見た感じは、いつもの商店街・・・だけど、景色は違う・・・午後  
はまわっているのでは、ないだろうか。彼は、歩き始めた、勿論・・・  
・学校に行く為だろう、商店街も活気さは、そのまま、何も変哲もない。

なのに、優輝の方は、ゆつくりと足を動かして歩く・・・何かに警戒をしているようだ。

そして、交差点にさしかかった。

ここまでなんて事もないと、逆に彼に安心感が出る。

だが、安心したのもつかの間、青になった信号を渡ろうとした時、右側から暴走したかのように走ってくる車が見えた。

「っな!？」

赤い、しかもまだ新しい何処かのメーカーの車・・・それは、止まらないのか、止められないのか、優輝めがけて走ってきた。

「うわあ!」

ガクンツと、体が落ちた感覚で彼は、ハツとする。

そこは、いつもの・・・いや、いま歩いている道、周囲では、嫌になるあの話題を話している人たち、そして、まだ午前中・・・立ちくらみがして、道沿いの壁に寄りかかる。体が思うように動かない、石みたいに重い。それどころか、嫌な汗をかき（冷や汗ともいう）少しだが、体温が下がっているのを感じた。

「な、なんだっただ・・・さっきの・・・は、俺、やっぱり、頭おかしいのか？」

そう思いながらも、重い体を起こして、ふらつきながらも、学校へ足を運ぶのだった。

\* \* \* \*

あの男の子がいた、商店街の近くの道沿いでは、椎と英樹が歩いていた。

「あれえ、見失った・・・“感覚”がなくなっただぜ」

悔しそうに英樹は言った。

「・・・遠ざかったか、それとも、力を使い切って、意識が途切れそうなのか？」

冷静に椎は、考えながら呟く。

「あゝ、追いかけて損だぜ・・・腹減ったなあゝ、しーちゃんメシ奢ってゝ」

椎にまるで猫の様にたかる英樹、その英樹を小突いて歩き出す。

「いつつ〜！でつかい音が出ない分、めちやくちゃ痛いんすけど？」

「・・・お前な、外のメシ食うとる金があるんなら、あのオンボロ建物の修理に使うとるやる！？」

負けじと英樹も反撃

「なんだよ、『家賃、払うくらいならボロイの買った方がマシや！』と叫んで、しかも、買う場所を値切りまくったの誰だよ・・・？『こんなボロいのに、そんな10単位の金が払えると思ってるのか？しかも、なんだこの壊れた壁は・・・ボツタクリだ』ってさ」

自慢げに覚えている言葉を口にし余裕を顔に出す。

どうやら、椎は、見た目に似合わず、貧乏性の様だ。

「それに」

「よう分かった、奢つたる・・・せやから、もう、それ以上、こんな街中で言わんといてくれ」

ほのかに顔を赤らめながら、そう言った。

「うっし！肉まんが食いたい・・・あ、でもたまにはファーストフードって言うのも・・・」

「もう、どうでもええ・・・」

「良くないよ・・・安いのを買うんなら、やっぱり肉まん2個か・・・いや、だったらファーストフード店で、セットのを」

「はぁ・・・（なんだか、何しにこんな場所まで歩いてきたのかよう分からん）」

椎は、怒った時だけではなく、呆れた時も関西弁が出るようだ。

\* \* \* \*

高校では、授業がもうすでに始まっていた。2時間目くらいだろうか、彼のクラスでは数学が始まっていた。

音を立て、クラスの前のドアが開く、そこには息を上げた、高崎優輝の姿があった。

「すみません、遅くなりました！」

「ん・・・？また、体調でも崩したのか高崎・・・」

呆れたような声を上げる数学教師

「すみません」

そう、一言、言つと、席に着いた。

教師の方もそれ以上言わず、そのまま授業を再開する。

「え・・・この数が、このように、くりあがると」

優輝もため息を付きながら、鞆から教科書類を取り出して、机に置く。すると、隣の席の友人が、小声で話しかけてきた。

「おい、大丈夫かよ・・・てつきり、事故でもあったかと思つたぜ？」

「事故？」

「ああ、だってよ、今多いじゃん“交通事故”が、だから巻き込まれたって思つてよ！」

すると、さらに斜めの友人も話しかけて来た。

「あ、あれだろ？交通事故起こした奴ら、皆『やってない、俺のせいじゃない！』みたいな奇声を一点張り・・・裏噂では、何かのテロじゃないか・・・なあんてのもあるらしいぜ？」

「まじかよ・・・」

「・・・（交通・・・事故）」

ふと、学校に来る前のあの光景を思い出す・・・厩気楼の様な、現実的なあの、“夢”のような光景・・・

「おほんつ・・・」

ハッと気がつくと、教師が立っていた。

「そんなに、私の授業が簡単すぎてつまらないなら、君らには、まだやっていない所を宿題にして出してやろう」

眉間にしわをよせていわれる。

が、なんとかその場を切り抜けると教師は、黒板に戻ってしまった。友人達は、さらに声を小さくして話す。

「だったら」

「じゃあ　って事？」

だが、彼は友人の会話より気になっている事があった。

交通事故、もし、あの“夢”のような出来事が本当ならと思うと、彼は背筋がゾツとした。

だから、考えた。

“　あの後、何があったのか”　と

その時、また彼の周りの景色が“飛んだ”

それは、あの午後の時間、交差点で信号待ちをしている時だった。

信号が青になると人が次々に渡って行く。この後、何があるのかは彼にも分かっている。だからこそ、動く事が出来なideいた。それでも、覚悟を決めて信号を渡る。と、右側から、あの暴走したような車が走ってきた。また、同じ光景・・・足がすくんだ、だが、何とか避ける事はできた。

通り過ぎていく車を見つつ

「・・・避けたのか」

そう思い、胸を撫で下ろした時、車の前に小学生が飛び出し

「！！」

ガタン

椅子が倒れた。それは、優輝の椅子・・・

景色は戻り、場所は学校の教室の中、いきなり立ち上がった優輝にクラスの間達は驚いている。優輝は、机に両手をついた。



「大丈夫か？優輝・・・？」

「どうした高崎？」

友人や教師が心配して声をかけるが、周りの声が聞こえていないようだ、彼の汗ばんだ顔からは汗が机にしたり落ちる。

「はぁ、はぁ・・・そんな、まさか」

そう、言った瞬間、彼は床に崩れて倒れた。

目を覚ますと、白いカーテンが目についた。風も気持ちが良い・・・どうやら、保健室のようだった。友人達が連れてきてくれたのだろう。鞆まで置いてある。

顔を横に向けると、養護教諭（保健の先生とも言つ）の教師が居るのが分かる。

「授業は・・・？」

声をかけられて、驚きもしないで、その教師は立ち上がると、優輝に近寄りながら言った。

「今日は、午前中までらしいじゃない？もう、今日は下校ね」

「そうですか・・・」

そう言つと、立ち上がるうとした。

「っ・・・」

「まだ無理なんじゃない？休んでいきなさい、帰りに倒れられても困るもの」

だが、休みたいのもやまやまだったが、どうしても確認したい事があった。普段だったら、偶然で済ませられた事だったが、今度は自分だけの問題じゃない気がした。

「帰らせてください・・・いえ、帰らないと、いけない気がするんです」

それを聞いた、養護教諭の教師は、小さなため息を付いて、デスクの椅子に座ると言った。

「いいわ、担任には、私から事情を話しておきましょう？帰っていいわよ？」

そう言うと、背を向けて仕事をまた再開し始めるのだった。  
優輝は、教師の背に頭を下げると鞆を持って慌てて、学校を後にした。

商店街につくと、あの“光景”で起こる小学生を探す。だが、見つける事が出来ない。

やっぱり“夢”だったのではないだろうか……。そう思いながら、商店街の中を見渡しながら探す。が、気がつくと例の交差点に差し掛かってしまった。

小学生に会わなかった。あれは、やっぱり“夢”だったんだと、思い、諦めて信号待ちをして家へ帰ろうとした。信号が青になり、わたっている、右側から何かが走ってきた。

優輝は、それを見た事があった。色は赤くて しかもまだ新しい車が暴走して優輝めがけて

「!!」

避けた。その車は通り過ぎてく

「そんな……小学生には ！」

そう口にした時、もう一つ先にある交差点で小学生が沢山渡って歩いていた。

「っ……!!」

彼の今の距離からだと言に合うわけもない。

だけど、小学生達は、車が近づく前に渡りきってしまった。

「……よ、よか！」

すると、あと一人、遅れて走ってくる小学生が見えた。車はどんどん、その交差点に近づいてくる。

「!!」

“誰か あの子を助けて！車が ”

もうだめだ。見ている誰もが思った・・・だが、小学生の後ろから、強く手を掴んで、行くのを止める影があった。勿論、その小学生は驚いている。その前を暴走した車が通り過ぎ、曲がる事もなく、一軒の家めがけてぶつかり、大きな音を立て、動かなくなつた。

優輝は、安心したせいか、腰が抜ける。

「良かった・・・助かったんだあの子」

でも、車の方は、運転手は助かつていないのが分かるような光景が広がっていた。

（・・・あの人は、助けられなかったのか）

そう、思った時、優輝の前に2つの影が現れた。

バンダナをつけた男に、真面目そうな男・・・あまりにバランスが取れてない二人をみて優輝は啞然とする。

「お前もサイコか!？」

バンダナの方の男が聞いてきた。

「・・・はっ？」

「・・・それでは、分かるわけないだろう？そうだな、サイコと言うよりESPって言われたりなどしているのだが？」

もう一人の男が、軽く説明をしてくれた。

「イーエスपी？」

「エスパーって事だ!」

「ああ、ESP<sup>エスパー</sup>・・・って、誰が？」

納得した後の疑問は大きい

「お前だよ、お・ま・え!」

バンダナの男に突っ込まれる。

「さっき・・・「メッセージ」送ってきたら？たまたまキャッチ出来てね・・・朝もシンクロしたが、それも君だろうと、思ったんだ」

「シンクロ？メッセージ??」

「案の定、ビンゴ!ってところだな、しーちゃん」

訳の分からない事を優輝の目の前で起こっている。分からない事が、

だんだん、イライラした気持ちにさせる。優輝に、もう一人の男・  
・しーと呼ばれていた方が尋ねてきた。

「君は、どうして、あの子が轢かれるって分かったんだ？」

「すぐく、真剣な顔して言われる、だがそれ以前に優輝にも疑問があった。」

「どうして、俺が轢かれる子を知ってると思うんですか？」

「はっ？だって、お前が“メッセージ”送ったんじゃない？」

バンダナの男にそう言われて、さらに混乱をする。

「ま、待って、ちょっと待って！・・・俺、全然話の流れがつかめないんですけど？！」

2人の男達は、顔を見合わせた。

そして、バンダナの男が、優輝に話をふった。

「此処で会ったのも何かの縁だしさ、俺らの“家”に来ないか？」

「え・・・家、ですか？」

「いや、事務所だ・・・」

そう2人にそう言われたが、さっきの会話といい、いまいちついて行くにも、信用できない優輝、そこに、しーという男が言った。

「君が、知りたい・・・その疲れる原因・・・教えてあげられなくもないんだが。どうだろう？知りたくないか？」

「えっ！知ってるんですか？」

「勿論、俺らがちゃーんと、教えてやるぜ？同じ仲間みたいなもんだしよ！」

「・・・分かりました。話を聞くだけですから・・・」

付いていく事を決意した優輝に、2人の男は自己紹介を始めた。

「俺は、椎だ・・・っで、こいつは、英樹」

「浅茅英樹っていうんだ、宜しくな？」

「あ、あの・・・俺は、高崎優輝です」

すると、救急車とパトカーがやって来た。それを見た英樹は、慌てて優輝の手を引いて歩き出した。

「ど、どうしたんですか？」

「いや、警察に捕まったら、めんどいじゃん？だから、さっさと俺らの“家”に行こうぜ？」

「はぁ・・・（なんだか、やっぱり怪しい）」

そう思う、優輝だった。

だが、これが事件から起こった、出会いであつたことは・・・この3人は、知るよしもない。

## プリコグニション（後書き）

間違った知識を送ってしまった方も（いらなと思います）居ると思うので、少し訂正 サイコ・・・と、いうよりP<sup>サイ</sup>s iと言うのが、一番正しい言い方です。これは、ESP（もつと長いですが）とPKの2つをさします。まとめてP s iと呼ばれます。今回の、優輝と言う少年が使ったのは『予知』英語名はプリコグニションといます。この少年も加わり、交通事故の謎を解いていこうと思います。

P s iは、本当に体力を使うそうですね。使いすぎると、倒れる人がいるみたいですが・・・本当ですかね？（私も、確信がないもので・・・すみません）

そして、チャット・・・メールで、助言を下さった方々にお礼を言いたいと思います！有難うございました。

## P s i (サイ) (前書き)

助言を下さった方がいらっしやるので、直してみましたが、上手く直せませんでした。

## P s i (サイ)

ボロイ事務所、そこに似合わない綺麗なソファに優輝は、頑なに座っている。

「あ、あの、ここは？」

「家」

「ちがう……ここは俺達が経営している『何でも屋』と言う場所なんだ」

「何でも屋 ですか？」

優輝には、しっくりこなかった。建物自体が古くて壊れそう、どう見ても廃業しているようにしか見えない。優輝は、あたりを見渡ししていると英樹が、顔を覗き込んできた。

「！（ビックリした）」

「何でも屋は、表の顔ってやつで、もう一つ、違っのをやってるんだぜ！」

嬉しそうに話す英樹を、椎は止めた。

「ちょっと待て！いきなりすぎるだろ？俺が順々に話すから、お前は黙ってる」

「ちえ」

反対側のソファに腰を下ろした椎は、優輝を見る。

「君は、『予知』ができるね？」

「予知……あれは、予知って言うのですか？」

驚いた優輝は、立ち上がる勢いで椎に聞き返した。

「英語名は“プリコグニション”と言われるが、君の場合は少し特殊だなと、俺は思う。普通は、近い未来を知る事。か、ほぼ自分の周りをやっと思える。相手まで、気が回ることがないと、俺は聞いている」

「へー、そうなんだ。しーちゃん凄いな」

英樹が話しに割り込んできた



「・・・君の場合は“ESP”の可能性もある」

優輝は、少し考えると、椎に質問した。

「それってESPって事ですか？」

「いや、これは、本当にESPと言うものなのだが、詳しくはいや、まだ決まったわけじゃないから、ここまでにしておこう」

「え、教えてくれないんですか？」

「まあ、我々と行動を共にしてくれると言っているのであれば、考えなくもないが・・・」

優輝は（脅し？）と、少し思った。

「ついでだから、俺らのも教えてやるよ！」

英樹が、話したそうに、話に入ってきた。そして、勝手に語りだす。

「俺はな、“マインド・コントロール”って言うのを使えるんだ」

「マインドって、あの、人を操るってやつですか？」

「そうそう、よく知ってるな？まずくなったら、それでよく切り抜けるんだ。言っておくけど、俺のは、後遺症が残るぐらい危ない力じゃねえからな」

椎の隣に座り、楽しそうに、まだ話そうとする英樹

「じゃあ、椎さんののは・・・？」

「こいつ？こいつは」

「悪いが、教えられない」

英樹が言葉にする前に、椎に阻止された。

「えー、何でだよ。別にいいじゃん、盗まれるわけじゃねーだろ？」

「これは、口での説明だけじゃ、信じる事が出来ないモノなんだ  
世間でも、めったに知られていないし、名前すら聞いた事がない筈だ」

「聞いたことがない能力ですか」

優輝は不思議そうな表情をして、言った。

「ここまでの話しは、理解できたと思う。もう一つのやっている事は、俺達と似た力の奴を押さえることだ、悪用されては、かなわないからな」

そこまで言つと、立ち上がりどこかの部屋へ足を運ぶ

「あ、あの、あつちは何が？」

椎が行った場所を指を指して英樹に聞く

「ん？あそこか？台所みたいな場所、何か作るんじゃない？」

「そうですか」

「ところでさ、ゆうちゃん」

「は、はい？（ゆうちゃん…？）」

慣れない呼ばれ方に戸惑いながら優輝は、返事をした。

「家事とか、得意だったりする？」

「……はっ？どうしたんですか、突然」

いきなりの質問にさらに戸惑う優輝

「あのさ、俺らの手伝い（アシスタント）してくれね？身の回りの事でいいし、それにバイトだって思ってくれてもいい！無理にって言わねーけどさ」

「まあ、得意じゃないですが、一通りは出来ます（両親とも働いてるから）…だけど」

「マジ？やりー」

嬉しそうに、英樹は、台所だと言った場所に向かって叫んだ。

「しーちゃあーん！聞いたか？アッシーするってさあ、しかも、家事をほぼ担当で！」

「え、ちょ、あの、俺、まだ何も」

椎は、コーヒーが入ったコップを片手に持ち、壁に体を寄りかからせながら優輝を見ていた。

「ほう、それは助かるな」

「ですから俺は、まだ何も」

呆れた声を出す、優輝だったが、その場の光景が変わる。

また、いつもの様に“飛んだ”のだ

場所は、同じこの事務所、何かを3人でしている…テレビ、そう、テレビを見ているのだ。そこには、死亡交通事故のニュース…さっ

きの事故の情報だった。

口々に、3人で何かを話していたのだが、近くでパトカーの音を耳にした。外へと出て、サイレンのする場所へと向かってみると、そこには、また更なる交通事故の姿があった。

（まただ、別にたいした事でもないよな、こんなの見てしまいうくらいなら交通事故の一つくらいは防いで　　）

何気なく横を見た時、一人の男の人と目が合った。

「え　？」

また、体がガクンと落ちた。

そこは事務所、椎は優輝に近づき、顔を覗き込んできた。

「“見てきた”のか？」

そう聞かれた。優輝は、小さく頷いた。

「な、何見たんだよ、教えてくれよ？」

英樹も教えて欲しそうに、反対側のソファから身を乗り出して優輝に言う。

「あ、あの…えっと、さっきの事故は、はっきりしたテレビの報道って、何時くらいになりますか？」

その質問に、椎と英樹は顔を見合わせると、椎が答えた。

「夜中…そうでなければ、明日くらいだ」

「明日…（時間まで覚えてないし、朝か昼かも覚えてない、どう伝えよう）」

困った表情をした後、優輝は言った。

「確信が持てたら、そく教えます。だから、少し待ってください」

そう、2人に伝えた。

それを二人は、了承する。

だけど、それより優輝が気になっているのは、あの“人物”だった。顔は虚ろで覚えている自信はないが、服装は覚えていた。なんだか、変な雰囲気“予知”だが感じたのだ…

（もし、あいつが本当だったら、この事件は解決できるかもしれない

い)

優輝は思った。

空が暗くなり、優輝は帰ることを2人に言っと、立ち上がった。

けど、何かを思い出したように2人に質問をする。

「聞きたい事があったんです。交差点で“メッセージ”って俺に言  
つてたじゃないですか、それは何ですか？」

「ん？メッセージって、さっき言ったあれの事？」

不思議そうな表情で、英樹は言った。

「はい、聞いておこうと思って」

椎が説明をする。

「そう言えば、メッセージとしか言っていなかったな、あれは自分の  
思っていることを相手の意識に飛ばすんだ。だが、ほぼ一方的に送  
る・・・『言葉を届ける』と、考えてくれていい、簡単に言えば、  
伝えたいけど伝える事ができない場合は、“メッセージ”を残して  
いくだろ？相手の意思も関係なく、それと同じで君はあの時、“助  
けて欲しい”と願った。たまたま俺達の意識に届いたんだ。だか  
ら、英樹が走って、小学生を引き止めた」

「あの後、車が物凄いスピードで行っちゃった時は、マジでビビッ  
たけど…ちなみに会話するんならコネクトって言うんだってよ？」

英樹は、笑いながらそう言った。

「俺も驚きました…それじゃ、帰ります」

優輝は、頭を下げ、そのビルを後にする。

「英樹はどう思う、仲間になると思うか？」

「なってくれるって、後は、明日待ちって感じ？」

ソファに座ってそう会話を交わした。

「でもさ、どうしてしーちゃん的能力教えないのさ？俺、すげーっ  
て思うぜ？」

そう英樹が言くと、椎は、小さな溜め息をついて言った。

「どうせ、見せるんだ。今はいいだろう」

そう、話を流してしまった。

## P s i (サイ) (後書き)

プリコグニション、あったら便利かもしれませんね。私もあったら楽しそうだと思います。最近、ESPなどで面白い事を知ってきたので、それも話しに出来たらと思っています。次の話では椎の能力をちょっとお披露目すると思います

## アンチ・サイ

優輝は、ぼーぜんとしている。

呆れた顔で溜め息をつく。

何に對してか、そんなのは、自分に對してに決まっている。

理由は、今いる場所にある。

あの、自称『何でも屋』のビルから出て、家に帰り、普通に寝て、朝、学校に行った。

珍しく、今日は何も起きなかったその帰り道、嬉しさに軽い足取りで歩いていて、今に至る。

「まあ、来るつもりだったから別にいいんだけどさ……」

自分に呆れるように呟くが、溜め息付く暇も無く、扉が開いた。

「うわっ！マジで来た」

優輝は、どうやら、無意識に足が向いたらしい

出迎えてくれたのは、言うまでもない浅茅英樹であった。

勿論、優輝が来た場所は、『何でも屋』だったりする。

入れ入れと、背中を叩かれしぶしぶと中に入る優輝、最初に目に入るのは、あのソファ―

そこには、しーちゃんこと椎が座っている。

優輝は、別のソファ―に腰を下ろすと、椎に話しかけた。

「あの……」

「ん？何？」

「椎さんは、仕事とかしてるんですか？」

何気ない話題をふったつもりだったが、椎は不思議そうに聞き返してきた。

「……どう言う意味だ？」

「いや、椎さんて、真面目だから普通の仕事もしているだろうなあ  
って」

そこまで言つと、椎の顔が……いや、全体的に沈んだ様に見えた。

「あの、椎さん？」

「辞めたんや、こいつが、まともに此処で仕事せえへんし」

優輝は、『仕事をやめなくても』と、言いたかったが、言わないで  
おく。が、

「しーちゃん、仕事やめなくても良かったんじゃないのか？その方  
が、まだ、まともな暮らしが出来たかもしれないしさ！」

優輝の心が見透かされたように英樹は、椎に突っ込む。

「うっさいわ、こっちにも事情があんねん！それに、お前には言わ  
れとうない」

二人の会話に苦笑いをする優輝。

ムスツとした顔で英樹は、ソファに座ると、テレビをつけた。

『昨日、また 町で 』

昨日のニュースだった、鮮明に詳しくテレビで流れている。3人は  
黙ってみていた。

英樹は、何を考えているかも分からない表情でボーとして、（もし  
かして考えて何も考えていないかもしれない）見ている。

椎は、考えるように、テレビと睨めっこをしている。

「そう言えば、英樹さんて、『マインド・コントロール』って人を  
“操る”んですよね？」

「ん？いきなりなんだよ、ゆうちゃん。そりゃあ、俺の力は、人の  
記憶を」

そこまで言って、優輝を見た。

「へんなこと考えてる？考えてるだろ？」

「え、いや、その……まったく考えてないですよ？」

勿論、考えていた。自分がやっていないと言う運転の人、何かに操  
られていたのではないかと思う。そうじゃなければ、あんな無謀な  
事故が起こるわけも無い。

「お前も英樹と同じ事を言うんだな。こいつの持っている力は、君  
が考えている、そう言うのじゃない」

そう、切り出してきたのは、椎だった。楽しそうに笑いをこらえな



がらそう言う。

「そ、そうなんですか？」

「ほら！やっぱり考えてたじゃん！！」

怒る英樹をなだめながら、椎は言った。

「いつとくがな、マインド・コントロールは、“記憶の操作”あんな物騒な事は、できん」

「それにな、相手と目を合わせないと無理なんだよムツとした英樹が言葉を続けた。

「目を合わせるか…」

時計が、5時を指した時、遠くからサイレンのような音が聞こえてきた。

「サイレン…え、サイレン?!」

優輝は、慌てた。

「どないしたん」

椎が真剣な顔で聞いてくる。

「来て下さい！」

飛び出していく優輝の後ろを2人は、追う。

「何か、ワクワクするな？しーちゃん、よくあるテレビのサスペンス劇場みたいなの？」

目を輝かせながらそう言う英樹に、椎が呆れて言う。

「お前だけや、アホ」

サイレンが近づいていく…どうやら、優輝の狙いどおり、交通事故の現場に到着したようだ。

「またか…」

「うわあ、こりやまた運ちゃんダメじゃん？」

椎と英樹がそう言葉を交わしている中、優輝だけ辺りを見渡している。昨日の“あれ”が本当なら、きつと居る筈だと、何故か確信していたから

すると、何かがピシッと感じた。

「え…（何だこれ？）」

椎と英樹も感じたのか、身を構える。3人は、誰かと何らかの形でシンク口をしてしまったようだ。

そして、優輝が何気なく、ある場所をみた瞬間、気がつく。

「居た！英樹さん、椎さん、あの人だよ！」

えって顔で二人も指を指された方向を見る。

そこには、英樹もビルの屋上でマークした男がいたのだ。

「あ、あのおっさん！」

「あいつか…追うぞ」

椎と英樹が同時に地を蹴った。

男も、気がついてたのだろう、2人が走ってくる数秒前に背を向けて野次馬を押しつけながら逃げていた。

英樹達が男を追う、野次馬達のせいで男との距離を少し離されてしまったが、何とか、追いかけることができた。

「くそっ！」

男が叫ぶ、道沿いを曲がった先が行き止まりのビルの壁だったからだ。

「やっと、追いついたぜ？大人しくしろ！」

英樹が壁側に立つ男を人差し指でビシッと指し声を張った。

だが、男は、動じない…自信満々の笑みさえ見せる。

優輝は、小声で英樹に耳打ちする。

「まずくないですか？」

「なんで？」

「だって、向こう自信満々に見えるんですけど…」

「ん、そうみたいだな」

嬉しそうに言う英樹に少し、不安を覚える優輝

遠くでは、サイレンと野次馬の声が聞こえてくる。それだけで、この空気が、どれほど沈黙しているのかが分かる。

何を合図にしたのか、英樹が、男のふところめがけて飛び込んだ。いった。

「ちょ、英樹さん！」

男の笑みは、そのまま、相手もP s iなら何をしでかすか分からない。

冷たい空気が流れる。

優輝は、椎を見るが無表情でただ男を見ている。何かをする訳ではないのは、その顔を見るだけで分かる。だが、何も起こらず、英樹は、男を殴った。

ガッ

ガタンッ

無様に倒れる男は、慌てて声を上げる。

「な、何故！何も起こらん！？」

「ん？制御できてないんじゃない？」

ふざけているのか、英樹は嬉しそうに男に言った。

そして、胸ぐらを掴んで英樹は質問する。

「お前、何であんな事をしてたか教えろよ」

「…」

「無言か」

椎が、あたかも当たり前のように言葉をもらす。

「お前ら、俺に何もできないことでもしたんだろ？」

男は、英樹達に食って掛かった。

「お前に関係ないじゃん…それに」

何かを言おうとした時、野次馬側がうるさくなってきた。3人は（1人除いて）音が聞こえる方に、目を向けると、何かが走ってくる。見覚えがある。無い方がおかしいかもしれない。

「！」

爆発するようにぶつかった音がした。ビルの壁には、燃えている車…さらに、周りに野次馬が集まる。

「うわっ…英樹さん無事ですか！？」

「一応、だけど、逃げ出すだけであいつ助けるの失敗した」

そう言いながら少し煤だらけのような格好で歩いてくる英樹の姿を見て椎と優輝は、安堵する。

「悪い、俺が力を使うのを止めたばかりに、油断した」

椎の言葉に優輝は、少し考えてから驚いた。

「え、力って！いつの間に！分かりませんでしたよ？」

「あ、しーちゃん的能力説明してねーもん、普通分からねえって」

警察が駆けつけたのが、サイレンの音だけで分かった。

それを聴いた3人は、慌てて現場から離れて、自分達のビルに戻る。脱力する3人、いまいち状況が掴めていないのは、優輝なのかもしれない、仲間だと言われて初めて出会った人達の事を知らなさすぎるからだ。

脱力する2人に優輝は、話しかける。

勿論、知りたいのは色々あるが、今は一番身近な事が知りたい。

「あの、椎さんの力って？」

単刀直入聞いてみた。

椎も、別に隠すつもりなど無いのだろう、あっさりと話してくれる。

「俺の力は『アンチ・サイ』って言うんや」

「アンチ・サイ？」

本当に聞きなれない名だった。

「だけど、お前だつて見ただろ？」

英樹が嬉しそうに優輝に語りかける。

「え？俺には全然…」

分からないのも仕方が無い、だつて

「俺のは、“超能力を無効化”にする力があるんねん」

これが、椎の力だった。

だから、昨日、口で説明できないものは、教えたくないと言ったのだろう。

優輝もそれに、納得できた。あの時、いきなり英樹が飛び掛ったわけも、ちゃんと椎の合図があったからなのだ。

だから、あんなに容易く犯人であろう男を捕まえる事ができたのだ。

だけど気がかりな事があった。

「あの車… いったい、あの人が自殺したんですか？」

それは、優輝の疑問であって、椎と英樹の疑問でもあった。

次の日のニュースは、2回続けての事故の話でもち切りになったが、それ以降、不可解な交通事故が起こることは無くなった。

## アンチ・サイ（後書き）

何とか…書けたかなと思います。

これから、色々なP s iを出さなくては、と、少し張り切ってみたりします。

アンチ・サイのサイは、P s iの「サイ」です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3942a/>

---

～ Esper ～ 何でも屋営業中

2010年11月10日14時28分発行